

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 24 日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370635

研究課題名(和文) 自律的英語学習に向けたアクティブラーニングのカリキュラム構築と評価方法の開発

研究課題名(英文) Developing active learning-mediated college EFL curriculum for learner autonomy

研究代表者

金岡 正夫 (Kanaoka, Masao)

鹿児島大学・教育センター・准教授

研究者番号：00311118

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：大学英語教育(共通教育英語教育)カリキュラムの再構築の柱として、学習の自律化とアクティブラーニングの実働化を研究課題として3年間取り組んだ。英語教授法だけでなく、大学教育、自己形成論、グローバル化での英語教育など、学際的な視点から理論的考察、実態調査、授業モデルの構築と教育効果の検証を行った。大学レベルの英語学習者を自己成熟(アイデンティティ形成)＝言語成熟(社会に通用する自己の価値観、信念など、市民性を包括した英語能力)の両軸から捉え、この両側面の到達を正統的な大学英語学修力と定め、そのための共通教育英語カリキュラムモデルを構築し、実際の導入につなげた。

研究成果の概要(英文)：This research aimed at college EFL learners' self-reliant and self-regulated language learning performance (i.e., learner autonomy) through the implementation of a new EFL curriculum model that underscores the effects of exercising Active Learning strategies in and outside classroom.

研究分野：英語教育(カリキュラム)

キーワード：学習自律化 学習動機づけ 共通教育英語カリキュラム 社会構築主義

1. 研究開始当初の背景

これまで Learner Autonomy や Autonomous Language Learning は、EFL や L2 の枠組みの研究に加えて sociocultural, sociolinguistic の視点から検証する研究事例が目立った。そこには SLA を主体とした研究が数多くみられると同時に、行動主義カリキュラムをベースにする傾向にあった。他方、グローバル社会の到来とともに外国語としての英語教育もカリキュラム政策上、伝統主義・行動主義中心から社会構築主義へとシフトし、それに合わせた教授法の開発が急務となっている(Reagan, 1999)。社会構築主義のねらいは社会的自我の確立とそれによる社会参画を促し、個人においては協働性、社会においては共同体を目指すことにある(Gergen, 1997)。それゆえシチズンシップ教育や生涯学習が提唱され、具体的には個人の自立と学びの自律化が OECD の DeSeCo Project (Rychen, 2003) で強調されている。それは今日の知識基盤社会に不可欠な人的資本の必要要素である傍ら、そのような自己アイデンティティ形成と自律的な英語学習は表裏一体化したものであるという、新たな教育・学習概念を肯定化する動きでもある。それは自己知と他者知、関わりと交わりによる新たな発見とその解釈にむけた言語使用であり、それらを総合して異文化社会、多様化社会に求められる言語能力と捉える考えでもある(Byram, 1997)。そのような言語運用能力(communicative competence)を育てていくために、状況に埋め込まれた学習(situated learning)や正統的周辺参加(legitimate peripheral participation)(Lave & Wenger, 1991)の学習概念が重要となる。その点をふまえ、Littlewood (1996)は(1)人生のあり方(生き方や価値観の意味づけ)(2)言語学習プロセス(腑に落ちる学び方)(3)創造的かつ自発的コミュニケーション(学習文脈に適応した、独自性と創造的な方法による意思や意味のやりとり)が、自発的で自律的な英語学習者を育てていく条件であると示唆している。Oxford (2003)は、より学習者の視点に立ちながら英語学習の自律化を考え、その結果、文脈(context)、媒体(agency)、動機づけ(motivation)、学習方略(learning strategies)の4つの要素を重視し、それをもとに自律性の萌芽からその社会的汎用性に至る5つのレベルを提示している。具体的には(1)社会文化(特定の社会・文化的状況とそこでの他者性の理解)(2)社会文化(より広い状況でのコミュニケーション活動と、そのための認知的思考の育成)(3)政治批判(イデオロギー的状況下での対応)(4)技能関連(リテラシーの強化にむけた自発的活動)(5)心理関連(内面的成熟、人格形成)である。こ

の枠組みの意図は、自律的英語学習者はエゴ化せず、独断的でない確たる自己信念や価値観の構築によって生涯学び続けていける学習者として巣立つ必要性を示唆している。その意味でもアクティブラーニング(能動的学修)の介入は不可欠であり、今の大学生は高校までの受験偏重授業とは「異質化」した英語授業スタイルと学修方法の構築を主体的に望んでいることがアンケート調査結果(N = 2764) (H22-24 基盤研究C 課題番号 2252020: 前回採択分)から判明している。

2. 研究の目的

本研究では我が国固有の2つの教育的課題(大学のユニバーサル化に伴う質保証問題、および OECD に見られる高等教育政策と外国語政策に適合しうる授業改革)に着目する。その解決に向けた英語教育カリキュラムの構築を日本人学習者(大学生)の学習行動や学習方略の改変をめざすアクティブラーニングの視点から切り込んでいく。それによる英語学習の自律化可能性を理論的に精査し、実働モデルの構築につなげていく。その意味で、高等教育政策、外国語教育政策、そしてカリキュラム政策を包括的に捉えた新たな取り組みといえる。

3. 研究の方法

本研究の具体的到達目標は3点(3ステージ)である。(1)1)アクティブラーニングの本質性と英語学習への汎用性・応用実践性に関する理論的考察。2)アクティブラーニングと学習の自律化を包摂した先行研究や関連領域の収集と分析。3)生涯学習を視野にいれた言語教育政策とカリキュラム政策に関する研究事例の考察。以上の3点を包括した新たな理論体系の構築。(2)その理論体系をベースにした、アクティブラーニングと自律学習に係る包括的なアンケート調査の実施(大学生および大学英語教員対象:九州・沖縄圏、関西圏、関東圏の3ブロックで実施)。(3)その実施調査の結果を参考にしながら、自律的英語学習に向けたアクティブラーニングのカリキュラム構築と実働モデルの導入、実践、評価(分析と考察)そして理論的枠組みと実働モデルの統合に向けた包括的検証を行う。

4. 研究成果

1年目に行った大学教育に資するアクティブラーニング導入の背景、意義、教育効果等に関する情報・資料収集（(A)外国語としての英語教育、(B)高等教育、(C)学校教育という基本的領域）の整理、分析による理論的構築をふまえ、それをベースにしたアンケート調査（質問項目の作成、分析方法、実施手順、対象被験者の確定等）を2014年度（平成26年度）後期授業期間中に実施することができた。これは計画通りである。九州および関東圏内の国公立大学1年生（計4校）を対象に行い、約240名から有効回答を得ることができた。研究協力者（3名）と事前の打ち合わせ（アンケートデザイン、質問内容、回答方法、実施時期と方法、回収・送付方法等）を行い、その結果、支障なく実施することができた。質問構成については、実態と要望（ニーズ）との区分けを明確にする。そのうえで、アクティブラーニング、自律学習、

大学英語カリキュラム等に関する質問設定の明確化を図ることとした（多変量解析、因子分析、その他の分析作業に向けて）。その結果、[A] (1)高校時代の英語授業に関して、(2)高校時代の英語学習の能動・自発性（感心・意欲、学習動機、学習方法、学習プロセス、学習成果の自己評価、自発的学習活動・時間量、学習習慣）に関して、[B] 所属大学の英語授業に対する必要性と要望、[C] 現在の英語学習の能動・自発性に関して [C] 現在の英語学習状況に関して、[D] 技能別（観点別）英語スキル獲得・到達状況（自己評価）に関して [E] 大学英語授業・学習で臨むテーマ・タスクについて [社会構築主義の視点を中心に] [F] 教材（市販英語テキスト）に対する考え方について と6つの観点から多面的・重層的に回答を得ることができ、量的分析作業に入ることができた。

研究課題に関して、昨年度アンケート調査を実施し、これをもとに、今年度前半の成果として、(1)このデータの量的分析、考察、示唆を進め、包括的な整理をし、(2)課題1年目の理論的枠組みと得られたデータ分析結果を統合整理し、成果発表をシンポジウムの形で行った（第54回大学英語教育学会 JACET 国際大会、英語使用、研究分担者を含む共同発表）。(3)研究代表者の勤務校で、パイロットスタディを行った。(4)9月に渡英し、最終的な文献収集をオックスフォード、ケンブリッジの両

大学図書館を利用して行い、同時に、英語学習自律化と学習動機づけの研究最前線に立つ Dr. Ema Ushioda の研究室（英国ウォリック大学）を訪ね、今回の課題研究に対して研究・教育の両面から忌憚なき意見交換を行った。

今年度後半では、(5)研究論文（学会誌・査読付）を11月に発刊。(6)3年間にわたる研究活動の集大成として、課題研究に係る成果報告書を作成した。共通教育英語のカリキュラム改革と教授法の改革を、研究課題に係るキーワードを具体化しながらまとめた成果報告書であり、日本語版、英語版を作成。代表者の勤務校の共通教育英語授業の改革を具体的に推進する手引書となっている。(8)宮崎大学語学教育センター主催シンポジウム「グローバル時代に対応した英語教育とアクティブラーニング」（平成28年3月10日、宮崎大学）にシンポジストとして招請され、今回の科研の取り組みを踏まえながら、今後推進すべき共通教育英語カリキュラムの在り方について、理論と実践をもとに、報告と提言を行った。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計6件)

金岡正夫 (2013)大学英語カリキュラム構築にむけた探究的考察—高大英語授業の異相性と大学1年生および2年生英語学習者の現状をふまえて—Annual Review of English Learning and Teaching (大学英語教育学会九州沖縄支部),18, 1-21

金岡正夫 (2014)小～大連携英語教育の実働化（第12章「授業学」第1節 所収）英語教育の今—理論と実践の統合—（全国英語教育学会 第40回研究大会記念特別誌）1, 308-312

Masao KANAOKA (2014)Social Constructivist L2 Curriculum and Multi-Faceted L2 Self: Exploratory Insight into Possible Development of Learner Autonomy, Annual Review of English Learning and Teaching, 19, 17-44

Masao KANAOKA (2015) Multi-Faceted Self, Social Constructivist Context, and Communication Practice to Promote Learner Autonomy, JACET Journal, 59, 53-73

Masao KANAOKA (2015) Accomplishment, Efficacy, Achievement, and Self-Directedness in Language Learning: Exploring the Effects of Agency-Tuned Self-Orienting Contexts in College EFL, Annual Review of English Learning and Teaching, 20, 31-62

金岡正夫 (2016) 共通教育のリ・デザイン化—カリキュラムの実質化と英語授業の系統化—鹿児島大学教育センター年報, 12, 16-31

〔学会発表〕(計 7 件)

金岡正夫、横山千晶、渡辺敦子、樋口晶彦 (2014) 学習者目線から捉えた初年次英語授業とカリキュラムのリ・デザイン化—実態調査からの示唆と挑戦—第 20 回大学教育研究フォーラム 2014 年 03 月 19 日京都大学吉田キャンパス(京都府京都市左京区吉田二本松町)

金岡正夫(企画、話題提供)、土屋麻衣子(話題提供)、安永悟(話題提供)、川上典子(司会)(2014) Active Learning に向けた大学英語教育—協同学習と自立学習を視野に入れたカリキュラム構築—(シンポジウム)第 27 回大学英語教育学会九州・沖縄支部 支部研究大会

2014 年 07 月 05 日鹿児島大学教育学部(鹿児島県鹿児島市郡元 1-20-6)

Masao KANAOKA (2014) Perceptual Gaps of Learning and Teaching Freshman English at College 第 40 回全国英語教育学会 徳島研究大会 2014 年 08 月 10 日徳島大学 常三島キャンパス(徳島県徳島市南常三島 1 - 1)

金岡正夫(2014)カリキュラムから捉えた英語学習動機づけアンケート内容の共通性と課題点 第 43 回九州英語教育学会大分研究大会 2014 年 12 月 06 日大分大学旦野原キャンパス(大分県大分市旦野原 700)

金岡正夫(企画、司会、話題提供)、横山千晶(話題提供)、横山彰三(話題提供)、加藤千博(指定討論、話題提供)(2015)

高難易度大学・学部 1 年生が求める英語授業と教員像—「異質性」の正統化と共有に向けて—(参加者企画セッション)第 21 回大学教育研究フォーラム 2015 年 03 月 14 日京都大学吉田キャンパス(京都府京都市左京区吉田二本松町)

Masao KANAOKA, Chiaki YOKOYAMA,

Chihiro KATO, Yukiko TASHIMA (2015)

Insightful choice and optimum use of college EFL textbooks (symposium title)大学英語教育学会 (JACET) 第 54 回国際大会(国際学会)2015 年 08 月 30 日鹿児島大学(郡元キャンパス)

金岡正夫 (2016)

ELA と ESP の融合—2 つの成熟に向けた正統的学習文脈の導入—宮崎大学語学教育センター主催シンポジウム(特別企画第 2 回)(招待講演)2016 年 03 月 10 日宮崎大学(木花キャンパス)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕ホームページ等

6. 研究組織
(1)研究代表者 金岡正夫 (KANAOKA, Masao)
(鹿児島大学・教育センター・准教授)
研究者番号：00311118

(2)研究分担者
溝上慎一 (MIZOKAMI, Shinichi)(京都大学・高等教育研究開発推進センター・教授)
研究者番号：00283656

加藤千博 (KATO, Chihiro)(横浜市立大学・総合科学部・准教授) 研究者番号：20638233

横山千晶 (YOKOYAMA, Chiaki)(慶應義塾大学・法学部・教授) 研究者番号：60220571

(3)連携研究者
() 研究者番号：